ら分析する。註解において優先される文学的ジャンルは、歴史、預言書、書簡のジャンルであり、『詩編』を例外として、詩的ジャンルや知恵の書のジャンルは註解の対象とならない。伝統的修辞学では弁論の三つのジャンルを区別する。司法的弁論、議会的弁論、褒貶的弁論の三種である。この三種の区別を聖書に当てはめた場合、カルヴァンが重要視するのは、人間の盲目を告発する司法的弁論、および善悪を区別し人間に善を選択するよう説き勧める議会的弁論であり、聖書の叙情的側面は装飾的な褒貶的弁論として退ける。カルヴァンの聖書読解は、神学的前提を出発点に一貫した論理を見いだそうとする理性的性格（メランヒトンの影響）のものである。聖書における文飾の豊かさという概念については次のように擁護される。聖書における特権的な文彩は、反復および同格の言葉をつぎつぎと畳みかけるように並べる畳重法であるが、とくに反復といった文彩の中でももっとも単純な手法は、聖書における人工的性格の欠如を逆に強調するものである。また人工的装飾としてではなく、人間を真理に駆り立てるための心理的手段としての抑制した文彩使用から聖書の文学的美しさが生じる。以上のように理解された聖書の文体は、聖ジャン・クリュゾストモス註解で学んだ比喩にあふれた民衆向け説教の文体の影響を緩和し、理性的聖書理解とあわせてのちの彼自身の説教に応用されることとなる。第10章は聖書の文体の激しさについて、二種のテクストが区別される。『詩編』や『ロマ書』にみられる悲壮的文章は、誠実さの証である。一方、『エレミヤ書』や『ホセア書』などの論争的文章にみられる暴力的とでもいうべき激しい文体は、偽善者にショックを与えるための神の命令である。激しさの調子を与える文彩的手法としては、短文体、感嘆、感嘆的結語、修辞的疑問、皮肉があげられる。第11章は聖書の誇張的文彩について。虚構は真理に反するものとして退けられるべきだが、預言書に頻繁にみられる誇張法および、擬人法、活写法などの「模倣的」文彩は、歴史的事実ないし啓示、信仰に関する未曾有の事実を適当に表現するものとして文字通り受けとめるべきである。これらの文彩は表象的機能よりむしろ人間の注意をかき立てるという説得的機能を有するものとして是認される。第12章は対照法について述べる。旧約聖書にみられる暗黙的対照法（例：『詩編』119編、137編「主よ、あなたは正しく」は、主を離れては正義のかけらも見出されないと註解）とパウロにみられるシメトリックな明示的対照法が説明される。第二部を締めくくる第13章は聖書の美的基準と文体について述べる。カルヴァンは聖書について、伝統的修辞学の三文体節をとらずに、装飾性の濃淡によって二つの文体次元を区別する。第一の装飾性のうすい（ゼロではない）文体の基準は三つある。まず語彙、比喩表現の的確さと表現力の厚みであり、次に対照法などシメトリーに寄与する文彩によってかもしだされる音韻上のハーモニーであり、最後に内容と表現、とりわけ比喩表現の釣合いの三基準である。ところで、この優雅、自然な第一の文体の美的基準は伝統的修辞学の概念に近く、これまでに述べてきた、感情に訴える聖書独特の激しくときに粗野な誇張的な文体とは相容れないが、この対立は、本著の題名中、言葉の「力学」と訳した dynamique（対立する力の拮抗関係）という語で暗示されている意味の一つである。第二の次元は装飾性の濃い、褒貶体に属するいわゆる詩的な文体で、とくに『詩編』の文体が論じられる。詩的装飾が、その詩的側面を切り捨てられ、説得的心理的機能によって容認されるのはこれまでに述べてきたのと同様である。しかしながら、とくに『詩編』に特徴的なのは、他の聖書の各書にはみられない快い装飾に満ちあふれた中庸体の存在である。さて、聖書における以上の二つの文体次元の逆説的な並存（ことばの「力学」）は、神の威厳を知らしめるための手段にほかならない。すなわち、おごり高ぶる者には簡素・単純さを、聖書の粗野な文体を批判する不正な者には文学性を突きつけるのである。聖書にみられるもう一つの「力学」は、偉大さと卑小さの逆説的拮抗関係である。『ヨナ書』の簡潔な文体が人間存在の悲惨さを悲愴的に訴えかけるように、聖書の雄弁の根本は、卑小な事柄から真理の偉大さを教化し、感動せしめる崇高性にある。

第三部「作家カルヴァンの雄弁：連続性と断絶」では、第一部、第二部で論じた修辞家、註釈家のカルヴァンと関連づけながら、1536年の『キリスト教綱要』ラテン語初版前後の一連のテクス